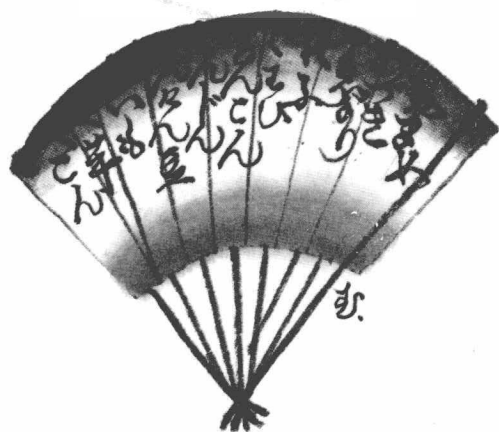


三世沢村田之助

小よし聞書

南條範夫



三世沢村田之助

——小よし聞書

一九八九年四月三十日 第一刷

著者 南條 範夫

発行者 豊田 健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京(二六五)二二二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Norio Nanjō 1989

Printed in Japan

ISBN4-16-310940-4

三世沢村田之助

——小よし聞書

装帧
村上
豊

数年前、私はニジンスキーに関する伝記並びに評論を五、六冊つづけて読んだ。今世紀初頭のいわゆるベルエポックに、新しい時代の新しい芸術を指し示す輝かしい星の一人として期待されながら、ニジンスキーは、舞台で踊ること僅か十年で、精神分裂症のため舞踊界から姿を消した。彼はその後三十年に互^{あひ}つて、生ける屍^{しかばね}として生存しつづけたが、その間、いくたびか復活を伝えられつつも、ついにその伝説的ともなっている素晴らしい跳躍を、再び見せることはなかった。

この悲運の天才の生涯について詳細のことを知るにつれ、私は自然に、三世沢村田之助の生涯について思いを致した。三世沢村田之助は幕末から明治初頭にかけて、艶美並びない天才的若女形^{おやま}として満都の子女を熱狂せしめ、團十郎、菊五郎らと共に明治新劇壇を背負って立つてであろうと期待されたが、その活躍は、十年にも満たないで終止符を打たれた。壞疽^{えいそ}のため四肢を損傷

したからである。不自由なからだになってからも、慄^{おそ}くべき氣力を以ていくたびか舞台に立ったが、ついに精神錯乱に陥って三十四歳の若さで死亡した。ニジンスキーのように生ける屍的存在を数十年に亘って続けるよりはかえって仕合せであったと云えるかも知れない。しかし、俳優が四肢を失うと云うことは、この上もない悲惨事である。やむなく舞台を退いてから死に至るまでの数年間の凄絶^{せいぜつ}とも云うべき田之助の心境を想えば、何びとも悲痛の情を禁じ得ないであろう。

私は、田之助の生涯を探り、その伝記をものしたいと考え、資料の蒐集に当たってみたが、驚くべきことに、この悲運の天才女形については、一冊の伝記も一冊の評論も著^あわされていないことを知った。かねて資料蒐集について力を借っているA——書店の兼井清一郎氏は、ずいぶん熱心に探してくれたが、結局、昭和初頭に、秦豊吉氏が雑誌「改造」に載せた評伝「沢村田之助」ぐらしいしかなかった。これは約八十頁に亘るかなり長いものであるが、伝記的部分は三十五頁ほどで、あとは田之助についての劇評の転載であった。それにしてもこれはきわめて貴重な資料である。このほかに、伊原青々園氏が「歌舞伎研究」に寄稿した「沢村田之助の一生」と云う文章もあったが、これは十数頁の簡単なものに過ぎない。別に、田之助と同時代に生きていた先輩の中村仲蔵、同僚の五代目菊五郎、後輩の沢村源之助、初代中村鴈治郎や、ずっと後になるが花柳章太郎などが、田之助について書いたものがあるが、源之助のもの以外はどれも極めて断片的な、随筆風の憶^{おも}い出話に過ぎない。

私は、田之助の生涯について書くことを一応断念した。だが、頭の一隅にはいつも田之助のことが残っていた。ところが、昨年末、兼井氏から、こんな珍しいものがありました、と云って、「小よし聞書」なるものを提供された。これは百五十頁ぐらいの孔版であるが、小よしと云う女の人が田之助について語ったものを、岡部章吉と云う人がアレンジして編述したものであった。一読して、この小よしと云うひとが、田之助と特別の関係にあった女人で、その死に至るまで側近に在ったことを知って、私は狂喜した。

その内容からみて、編述者の岡部氏は劇壇と何らかの関係のある人に違いないと思って調べてみると、果して、昭和三年松竹に買いとられる前の市村座に籍を置いたことのある人だと判明した。岡部氏は若い頃、偶然のことから晩年の小よしと知り合い、田之助について、特にその私生活について一般には到底知り得ないような事情を聞き知ったのである。そしてそれを、せめて一部の好事家たちだけにでも知らせたいと思って、とりあえずその大要をとりまとめ、大正十五年春孔版にして配ったものらしい。序言によっても、いずれ稿を改めて内容を整備し、伝記資料として公刊するつもりでいたことは明らかだ。だがそれは容易に実現されなかった。むろんそれは岡部氏の個人的事情によるものであったが、もし彼が、満州事変直後に召集され、北満で傷病死することがなかったならば、実現したかもしれない。「小よし聞書」は残念ながら未定稿のままに終わった訳だが、それにしてもこれは田之助の、殊にその晩年の私生活については恐らく、

唯一の信頼すべき記述であろう。

私は再び執筆欲に駆られた。そこで「小よし聞書」と上述した人々の述作その他を参照して、田之助の生涯を再構築してみることとした。だが、その本文に入る前に、「小よし聞書」の成立した由来を簡単に記しておくのが、岡部章吉氏に対する礼儀であろうと思う。

「小よし聞書」によると、岡部氏が初めて小よしと知り合ったのは、大正十年の春、彼がT大学文学部在学中のことである。岡部章吉の父君は東京赤坂福吉町一番地で杏林堂医院を経営していた。大通りから氷川神社の方へ上ってゆく坂道の中ほどである。杏林堂医院の患者は概ね山の手、それも赤坂区内に限られていたらしいが、時々下町の人が出てくることがあった。多分、赤坂区内の人の紹介によったのであろう。神田鍛冶町に住んでいた小林家の人々——と云っても母親と娘の二人であつたが——が診察を受けに来たのは、章吉の母君の遊芸の師匠の紹介によつたものだ云う。

小林母娘は、明らかに粹筋とわかる色っぽい身装をしていたので、その頃の山の手の中流の官員や会社員の野暮つたい家族たちとは際立つた対照をみせており、この親子が玄関から待合室にはいつてくると、狭い部屋の中がパツと明るくなるようだった。ちょうど青春期の真盛りにあつた岡部章吉にとっては、頗る魅力的な存在となつたことは当然であらう。むろん、最も強く彼の関心を惹いたのは、お俊ちゃんと云う当時十七、八の娘さんの方である。美しい着物を着て、何やらよい匂いをさせ、口の中でキュウッキュウツとほおずきを鳴らし、白い歯をみせて大きな声

を立てて笑うお俊ちゃんと章吉とは、すぐに親しくなった。

坊ちゃん遊びにいらつしゃい、と誘ってくれたのは、母親の方であった。大学生になっているのに坊ちゃん呼ばわりは少々閉口したが、小林さんの社会では、坊ちゃんを卒業したものは若旦那と呼ばれるらしい。若旦那よりはましだと、章吉は我慢した。もっとも、お俊ちゃんの家に行けるのなら、大抵のことは我慢しただろう。

小林家は、神田須田町の市電の乗換点からそんなに遠くない、ひどくごちゃごちゃした家並のつづく横町にあつて、稀音家^{きねや}何とかと云う看板がかかつていた。母親が長唄の師匠だったらしい。昼間から少々薄暗い、陽当りの悪い家の中で、土間の提灯^{ちようちん}に火が灯つていたり、壁際に三味線が並んでいた、何かひどく派手な温習会のビラが貼りつけてあったり、破魔弓や熊手やおかめの面などがあちこちに飾つてあったりして、赤坂の岡部家の雰囲気とはまるで違つていた。

章吉が初めてお俊ちゃんにつれられていった時、はいつたとつきの部屋に十二、三の若い娘が何人かいた。三味線や琴を習いに来ているのだろう。お師匠さんであるお俊ちゃんの母親のおすぎさんは、もと芸者だったらしいが、いつも愛想がよくて賑やかな人だった。お俊ちゃんは、場違いな感じでちょっとろたえている章吉を促して、長い土間を通り抜け、中庭の向うの土蔵のような作りの建物に案内した。そこに七十ぐらいの老女がいた。お俊ちゃんにも、母親にも似ていない。おばあさんと呼ばれていたが、血のつながりはないのだろう。この人も若い頃は芸者

か遊芸の師匠だったと思われる垢抜けのした感じだった。下町特有の艶めかしさが残っており、白い陶磁器のように沈んだ白さをもつ肌、年に似合わぬ綺麗な黒い瞳、心持ち大きい美しく引締った口元、小柄ながらすんなりとした身体つき、半ば白くなっているが豊かなやさしい髪の毛、そのどれもがしっかりと落ちていて、過ぎ去ったばかりの明治と云う時代が、そのまま眼前によみがえってきたような感じだった。このおばあさんが、他ならぬ小よしだったのである。

章吉はあまり人みしりをしない性格なので、この小よしに初対面から好意を持って気軽に話したし、小よしもその章吉に対して同じような好意を感じたらしく、二人はすぐに「仲良し」になった。小よしは決して饒舌ではなかったが、歯切れのよい口調で愛想よく話しかけ、お菓子や果物をすすめた。お俊ちゃんが母親に呼ばれてしばしば席を立てていってしまうのには少々がっかりしたが、章吉はおばあさんを相手に愉しく話していた。

お俊ちゃんは母親に代って小さい兄たちに琴や三味線を教えていた。そのため、しばしば章吉の傍らから姿を消したが、坊ちゃん私お使いに行くの、一緒にいらっしやい——と、母親の使役から逃げ出す口実だったかも知れない、そう云って章吉を誘い出すこともあった。そんな時、小よしは大抵、私も一緒に、とついてくる。お俊ちゃんと二人切りの方が良いに決っているが、若い男女二人だけで外を歩くと白い眼で見られる時代だったから、おばあさんがついてきてくれるのも悪くはない。小よしは、いつも重い風呂敷包みを持って、後からついてくるので、

「おばあちゃん、重くないかな、持ってあげようか」

章吉がそう云うと、お俊ちゃんはクスリと笑った。

「いいの、あれがおばあちゃんの氣に入っているの。若い綺麗に着飾った娘さん——それ私のことよ——が大きな包みなど抱えて歩くななんてみつともないって、いつも自分が荷物を持って歩くの。苦しうに見えるけど、あれで一番安心してるの、私が持ったりすると、よこせよこせってうるさく氣をつかって大変」

その後も見ていると、小よしはいつも荷物を引受けて、お俊ちゃんのうしろから、まるで女中のようにくつついて歩いてゆくのだった。

お俊ちゃんのいない時、小よしは、年の若い山の手の坊ちゃんをもてなすために、古い絵草紙や版画などを次々に持ち出してきて見せてくれた。それがたまたま章吉を大いに悦よろこばせた。と云うのは、章吉はそうしたものを、父の書齋で見つけ、内緒で大いに読んだり観賞したりしていたからだ。それに高校時代から演劇部などに加入して、歌舞伎の研究などに頭をつっ込んでいたので、その年頃の青年としては、割合に江戸の絵本類などには親しんでいた方だった。

小よしのみせてくれた絵草紙の中に、「沢村田之助曙草紙あけぼのぞうし」岡本起泉作、芳川春濤関、楊洲周延画と云うのがあった。全五冊、明治十三年十月十一日浅草瓦町十二、地本問屋島鮮堂の刊行である。極彩色の表紙に飾られた和綴じの袋入り、勿論、読みにくい変体仮名でぎっしり文字が詰

っている。

章吉がその草紙の第一冊を手にとって、一頁ほど眼を通してから、

「面白そうですね、家に帰ってゆっくり読みたいから、しばらく貸して下さい」

と云うと、小よしは、

「まあ、坊ちゃん、こんなものをお読みになりますか」

とびっくりしたように云ったが、その瞳の中に、愕きよりも悦びの色の方が強く浮かんでいるように思われた。

「だってこれ、田之助のことを小説にしたものでしょう」

「田之太夫を御存知なのですか」

田之太夫と云う呼び方に、ふっと明治を感じながら章吉が答えた。

「知ってるってほどじゃないけど。ヘボンに脚を切られて、義足で舞台に立ったとか云うんでしよう」

章吉の田之助についての知識は、その時は、そのくらいのものであった。

「よろしかったらお持ち帰りになって、お読み下さいまし」

小よしはそう云った。

章吉は借りて帰って、変体仮名にかなり時間をとられながらどうやら読みこなした。返しにゆ

くと、小よしは待ち兼ねていたように、面白うござんしたかと云う。実際のところは決して面白くなかった。一読して不自然と思われる親子の因縁話が中心の一つになっており、人物も場面も全くつくりもので感銘は薄い。田之助をめぐる多くの女人の色模様についても、噂話をもとにあれこれと派手にでっち上げただけの読みものだった。しかし、大いに期待しているらしい小よしの顔をみると、正直につまらなかつた、とも答え兼ねた。

もっとも全く興味がなかつた訳ではない。一二、心に残つた場面もある。例えば、冒頭のあたり、「水際たちし紫色の野郎帽子に振袖」姿で供をつれた少年田之助が喧嘩騒ぎに逃げ散る群衆に押されてゆくのを、幼い千代吉が見送つてほのかに胸のときめきを覚えるところや、末尾に近く田之助が両脚を喪う凄惨な場面などである。殊に、逃げてゆく田之助の後姿が、悪者にさらわれてゆくお姫さまのようで何となく切なく痛々しく、その後姿に恋心を覚えた千代吉の幼い気持がよく分るような気がした、と云うようなことを章吉がしゃべると、小よしは目を巨きくした。白い柔和な顔が急にいきいきとして、まるで真珠が微笑したような感じになった。

「坊ちゃんもそうでしたか」

「おばあさんもそうなの？」

「ええ、そうですとも——だって私が初めて田之太夫を見たのも後姿、それも太夫が十四、五の頃、私は八つか九つの頃でした」

「ふーん、田之助をみたことあるの？」

「ありますとも、初めは後姿だけでしたけれど——そのあとで——」

「何度も見たの？」

「ええ、ええ」

と大きくうなずいてから懐かし気に、

「ただ見ただけじゃありません、もつともつと——」

何か意味あり気の思ひ掛けない言葉に章吉が吃驚（びつくり）していると、小よしは、

「坊ちゃん、いいものを見せて上げましょう」

と云って戸棚から版画を一重ね出して、重そうにかかえてきた。今迄（まで）みせてくれたものとは別にしてあったものらしいが、愕（おどろ）いたことにそれは凡て、田之助の似顔絵で、百枚以上もあった。

「凄（すさま）しい田之助ファンだったんですね」

栗島すみ子や川田芳子のプロマイドを内緒で集めていた章吉は嬉しくなつて云った。

「ファンどころじゃありません、もっと深い仲でした、田之太夫が亡くなった時、お側にいたのはこの私だけだったのです、おかみさんのお国さまでさえ、夜が明けてから馳（は）せつけてきたのですから」

このおばあさんは田之助と、一体どう云う関係だったのだろう、もしかしたら曙草紙の中に出

てきた女の一人だったのではないのか。章吉が少々遠慮しながら遠回しにそんな疑問を口にする
と、小よしは言下に否定した。

「この物語に出てくる女子おなごと同じ名前の女の人はいました。千代吉、大幸だきう、おかつ、志女寿しめぢう、小花——みんな本当にいたひとです。でもここに書いてあることはみんなでたらめです。本当のことを知っているのは、もう私一人ぐらいのものでしょう。その私は、この物語には出てきませんけれど」

それは何故かと不審を抱いた章吉に小よしは答えた。

「私はいつも陰の方に、田之太夫の家の一番暗い片隅にいましたから、外から来た人の目に入らなかったのですよ。そしてその方が、私には嬉しかったのです」

そう云う小よしの表情をみて、章吉は何故か少し無惨な感じを受け、その場でそれ以上深い事情を追及することを遠慮した。

百枚以上の田之助の役者絵は、どれも型通りのもので章吉の目にはそれほど美しいものには思われなかったが、小よしはその一枚一枚を、もう何十度何百度も見ただであろうのに、改めてまた融けてしまいそうな表情で眺め入った。そして、これは何と云う芝居の何の役を演やった時のもの
だとか、いつ頃のものでどんな評判を得たかとかについて、まるで小川のせせらぎのように小さ
な声でしゃべりつづけ、その自分の話に酔っているかのように見えた。